

している本人にも分からないような逸脱で、批評のようなものがあって、事後的に成功した作品として確認されたりする。そういうイメージがあると思うんです。成功するハウツー的な逸脱の仕方とか越境の仕方とか、それはほとんど定義上語れないという所があると思います。でも、では何でも良いのかということではなくて、だからある種の批評とか言語が生きてくるのだと思います。批評が全部正しいわけではありませんけれども、様々な批評とかその作品について語るとか、あるいはその作品に対して別の作品を提示するとか、そういうプロセスがおこってくるのではないのでしょうか。それぐらいのことしか言えません。

司会 私もちよっと質問があるんですけども、今のベンヤミンの越境という概念に関して、アドルノのそういう発言は、彼がホルクハイマーとともに書いた、例の『啓蒙の弁証法』の中にあります。そこでは、近代の啓蒙は、神話の破壊・解体でありながら、しかし合理化一辺倒ということで、別な意味で後退としてとらえることがかえってまた別の神話を生んでいるという批判が行われます。そういう『啓蒙の弁証法』の論理がそういう統合化に対する見方につながっているのではないかと思います、どうでしょうか。

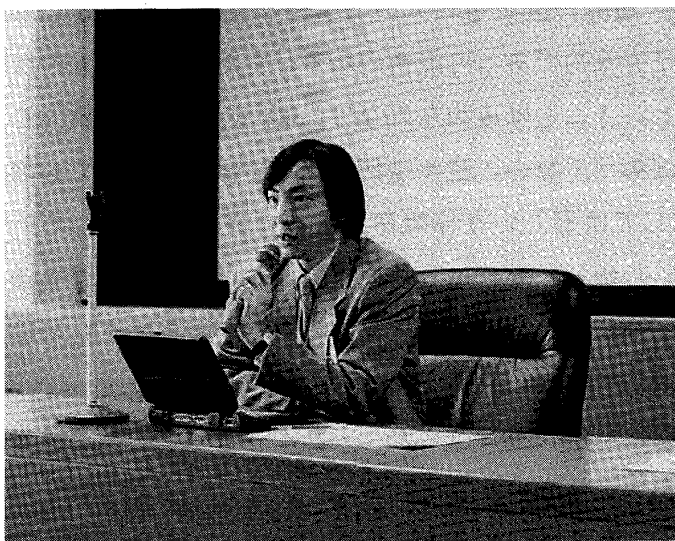
細見 そこは、『啓蒙の弁証法』自体が1つのジレンマに陥っているところでして、そういう総合化が1つの新しい野蛮を生むということを想像的に考えているところがあります。その辺が『啓蒙の弁証法』に示された、アドルノとホルクハイマーの思想自体のもっている、ある少しラフあるいはルーズな所でもあると思うんです。近代市民社会の批判が、同時に非常に広範なホメロス以来のギリシャ以来の歴史の批判という形になっているという問題です。いわゆるブルジョア社会はいつ始まったんだっていわれると、ホルクハイマーやアドルノは、極端な場合ギリシャ以来そうだということを言いかねない。つまり、近代ブルジョア社会というのと交換社会とはほとんどイコールという発想になっている所があるんです。そのあたりが本当に厳密に考えますと、とてもルーズな発想になっている。逆に言うと、どうしてもやっぱり包括的な思想の危険性というのを説く場合に、そういう説き方自体がある種の包括的な考えになって説かれる。そういう2重性みたいなものを抱え込んでいて、それが『啓蒙の弁証法』の大きな枠組みであると同時に、ハーバマスなどからずっと批判されるような構造でもあるわけです。

司会 それではもう時間がありませんので、細見さんのご報告はここまでにします。それでは続きまして、圓岡偉男さんからお願いいたします。

圓岡偉男「人間科学の行方」

圓岡 早稲田大学の圓岡偉男です。専門は社会学でございまして、主に理論社会学と呼ばれる

領域を研究しています。私自身は、およそ7年前に稲田大学人間科学研究科の大学院ができた時の第1回目の入学者であり、卒業者であるわけです。そこでは、社会学という自分の研究領域を持ちながら、人間科学の中に入れられまして、人間科学というものの学問体系に寄与すべく期待されていたわけです。創設当初ということにして、様々な理想や理念を押しつけられていたような気はいくつかあるんですけど、やはりその中で人間科学とはいったい何だろうかという問いは私自身の中にもありました。そのようなことから理論社会学という1つのわらじを履きながら、もう一方で人間科学というわらじも履いてまいりました。その1つの成果といたしまして、昨年学位論文を提出しまして、そこでは「存在と構成」というタイトルをつけまして、副題を「人間科学基礎論」としました。私がそこで述べたことは、科学論の一般に通じる、しかも人間科学に通ずるものを私自身なりに探索した結論です。今日は、その「人間科学の行方」ということでご報告するわけでございます。おそらく人間科学には様々な学問体系があるであろうと思います。いやむしろ人間科学にはそういう枠組みがまだない。といたしますと、人間科学とは一体何だろうということになります。それは人間自身もつ多面的な側面に多くは起因している。人間は生物であります、単なる生物ではございませんで、様々な行動をいたしますし、その中には習慣的行動もあります。私自身非常勤で教えているわけですが、一般教養の社会学の1番最初の講義の時に、こう話しています。生きることと死なないことは別問題だろうということから、社会学が生まれます。つまり死なないことですが、おそらくこれは生物学のレベルの話でまず論じますと、生命体として生きるということ。それは人間として生きるということと別問題です。人間科学にはいかなる可能性もあるということ。人間科学の行方と称したんですが、実は人間科学は行方不明です。現時点では、それはいかなるもので、どこにあるかということすら含めて不明です。ならば何らかの枠組みをつくる必要があります。誰かがやらなければなりません。そのような立場に立って、今日は簡単にトルソの段階ですけれども、枠組みについて私なりの見解を示したいと思います。



レジュメ〔64～65頁の資料(3)を参照〕の方を見ていただきたいのですが、今日は4点についてお話したいと思います。1点は科学とは何かです。人間科学とは人間の後に科学が付くわけです。それではこの科学はいったい何を意味するのかということになります。第2点は人間科学のシステムの類型です。これに対して私なりの見解を示したい。そして諸学との関係を考えたい。第3点は、諸学の学際性と専門

性を考えて見ようと思います。さらに続けて人間科学の行方を考えたい。

科学とは何か。普通にいわれている視点で見ますと、一定の領域の対象を客観的な方法で系統的に研究する方法です。これは今までの方針なんですけれども、さらに学習研究者の人や対象を組織的系統的に研究して普遍的な原理法則を求めることです。第2番目として特に自然科学があげられ、3番目としまして広く学問というふうに書いています。私は今日右側の2つ程図をもってきたんですが、その下にニクラス・ルーマンの名前があります。これはドイツの社会学者なんですけど、ルーマンの研究におよそ14年程かかわっております。ルーマンはドイツの社会学者なんですけど、ドイツ語に親しんでいる期間が長かったものですからちょっと英語で言葉発するのは難しいんですが、ドイツ語で科学をいいますとヴィッセンシャフトです。ヴィッセンがついています。

ヴィッセンとは知のことです。それではそのような知一般、それはいったい何だろうか。それは1つの認識体系を与えてくれる枠組みです。科学の機能というのは特定の対象に対する理解を導いてくれる枠組みのことであると私は考えております。つまり、科学というものは一つの認識体系ですから、そこには様々な自然科学の視座から理解を導くことも可能でしょうし、あるいは社会科学、特に自然科学の視座から1つの知識を導くことも可能であると思います。

ただ今、社会科学、人文科学、自然科学、自然科学ということを書いたけれども、これらが特定の視座、特定の主題のもとでの認識であるということはまず確認しなければいけないだろう。つまり問題なのは、いかなる主題のもとで認識がなされているのか、いかなる主題が問題なのかということです。これが自覚的に認識されないと明確な認識が得られません。もちろん、竹を割ったようにきっちりとそのような分け方ができるのは、極めて希なことかもしれない。しかし、それにも関わらず、特定の人としての認識ということは自覚しなくてはならないのです。

前に認識の枠組みを提供する営為そのものが科学的営為だと考えております。認識についてのおそらくカントの理論だとか、極めて一般的に流布されているような見解なのかもしれない。だから認識の枠組みというのは極めて抽象的である可能性がある。ただ具体的なものは現実的で、抽象的なものは非現実的であるということは戒められなければいけない。抽象的であるからそれは非現実的なんだということはありません。我々は何らかの枠組みをもってものを見ているわけです。目の前にある机に対しては形という枠組みをもって我々は認識しています。木という素材も我々は知っています。しかし、それはみんな抽象なわけです。抽象を通して個体を認識している。だとするならば、抽象的なものが非現実的であるなどという見解はありません。

我々がものを見ると、それは観察をするという言葉で置きかえられる。特に学的営為においては、観察という言葉で置き換えられるかもしれない。認識の端緒というのはまず観察なのかもしれない。ただ観察の形態には様々な形態がある。先程言った視座というものは観察の形態

に重なる。我々はある種の抽象をもってものを見る。それは1つのカテゴリーであり、モデルと呼ばれるものかもしれません。ただ我々は何らかの枠組みがないと何も見えない。

今日お配りしましたレジユメの右側に、ドイツ語で認知のモデル構造についての1つのモデルが書かれています。1番上には認知のモデル化があり、右下にはキュンストリッヒな認知のモデル化があります。キュンストリッヒというドイツ語は芸術的ということで、英語でいうアーティフィシャルです。人文科学あるいは自然科学的な枠組みがあります。それが内面化されて我々がものを見る時、特に形から見ているのだという意識をもってものを見るわけではありません。それは内面化されているからです。しかし、ものごとを改めて見ようとすると、これは形で見ているというような自覚があります。そのような形で、様々なモデル化と内面化、その中で1つの認知を始めている。そして、我々はさらにそれを解釈し、吟味し、さらにそれをもって科学を進める。そのようなプロセスがあるわけです。

次に2番目の「人間科学のシステム論的類型」という所ですが、人間には様々な側面がある。生物体として、あるいは他者と生きる人間として、あるいは心をもった人間としての側面です。そこでまた、レジユメの右側の下の図を見ていただきたいのですけれども、これは社会学者ルーマンのシステム論の類型の中の1つであります。これは「タイプ・オブ・セルフリフェンシャル・オートポイエティック・システムズ」というものです。実はルーマンという人は自己言及的なオートポイエティック・システムを理論化した人です。オートポイエティック・システムという言葉は耳慣れない言葉かもしれませんが、いわゆる自己産出的なシステム、しかも自己の要素を自己の中で産出するようなシステムのことをオートポイエティック・システムといいます。これはもともと生物学の方で展開された部分もありまして、生命現象を説明するための概念でありました。それを例の社会システムの中に転用し、それを応用し、さらに発展させるという仕事をしました。その中でルーマンはこのオートポイエティック・システムをこのような3つのシステムに分けています。しかし、私はオートポイエティック・システムというところを「人間」に置き換えることによって、さらなるものが見えるのではないかと思います。システム論というのですが、ここを人間と置き換える。そうすると人間の1つの側面が見えてくる。

ここにおける人間の科学、学問は何を目指すのか。これは、生体システム、心理的システム、社会システムというようにまず区分することができる。そして、これらのシステムの解明がそれぞれの学的体系に結びつく。生体システムですと生物学、心理システムですと心理学、社会システムですと社会学、あるいはもちろんそれに派生して医学、生理学、教育学、文化人類学というようなことになるわけです。

ただこれは、1つの人間というものをシステム的に区分した結果にすぎません。これだけでは人間の科学というに不十分です。奥谷先生のお話にもありましたが、細見先生のお話にもあったように、哲学という分野においても、やはり人間についての考察の長い歴史がある。それ

を無視して人間の科学は語れないだろう。

しかし、実は私は「人間についての学」と「人間の学」とは分けるべきではないだろうと考えています。個別なシステム、生体システム、社会システムなどという個別なものは人間についてのシステムです。これはある意味でミクロ分析です。ところがマクロな視点でものを見ることも必要である。最も重要なことかもしれません。それが恐らく哲学の領域です。特に哲学・倫理面の問題です。あるいは、先程ハイデガーの『存在と時間』のお話が出ましたけれども、ダーザイン〔現存在〕分析に見られる人間理解です。

そのような領域は人間を全体的に捉える側面です。この図には右側にこのシステムの領域を書いてあるんですが、実は左側がありまして、そこに哲学ということが入ってきます。さらにその上に人間は、実は地球という世界に生きているために、1つの生態系の中に生きている。生態系の中での人間ということもやはり考える必要がある。それは昨日の丹保先生のお話にあったような所でございます。少なくとも人間を考えると、マクロな視点というところちょっと語弊があるかもしれませんが、哲学というような全体論的な立場から見るマクロな視点が必要です。それから、個々の人間の身体に根づいているものかもしれませんが、生体振幅社会というようなミクロの分析も可能であって、むしろこれを総合したものが人間科学になりうるのではないかと考えています。

そしてさらに、人間科学というものを考える場が必要である。特に人間科学の基礎論、あるいは原論となるべく、さらに哲学の上をいくような、上位に値するような、1つの人間科学の中の学問体系というものがあって然るべきだと思います。もちろんそれが人間科学原論と呼ばれるようになるのかもしれない。

ただいずれにしましても、現段階でそのような体系があるわけではございません。既存の学問の上に人間科学は成り立っているわけです。ですから、その既存の学問をどう生かしていくのか、むしろそのことの方法が問題だろう。もちろん、その新たな人間科学の学的というか体系ができ上がるならば、それに越したことはないかもしれません。しかし、現段階では恐らく難しいでしょう。だとすると、その専門性をいかに見ていくのかという点が問題になってくると思うわけです。

学問はそれぞれの歴史をもっていますし、特にこの学問は歴史をもっています。もちろん、それは1つの専門分化の歴史だったかもしれません。あるいはそれは進歩だと呼ばれていたかもしれない。いずれにせよ、学問の進歩とは新たな理解の獲得であつたらう。そして、それは未知なる真理の追求の結果だったのかもしれない。学問の進歩は、それに伴いましてさらに精密性、厳密性、さらなる抽象化をもたらすことだ。そうしますと、理念や概念の拡張ということにつながってきた。

ところがやがて行き詰まる場合もあるわけです。あるいはそれでは対応できない現象にぶつかることもある。例えば、倫理の問題ですと、バイオシックスが昨今話題になっておりますけ

れども、これは医学、生物学の進歩があって生じた問題であるわけです。人間があっさり死んでいるならば、そのような生命に関する議論はもち上がらなかったかもしれない。しかし、その倫理という学問以外の所で発達した学問の影響が倫理に返ってくる。もうこれは倫理だけの問題ではないわけです。そうしますと、固有の学問の専門性だけでは手に負えない状況に陥ることもあるわけです。そうすると、誤解を覚悟で言えば、近接領域との接近、あるいは融和、融合ということが必要になる。それは既存の学問のポテンシャルを越えてしまう。ある意味では、次元を越えてしまう。だからこそ扱えない問題、その専門性の中で扱えない問題、専門性の次元というものを越えた別の次元の話題になってしまう。このとき最初に申しました、いかなる視座でもものを見ているのかを自覚的になさないまま議論を進めますと、おそらくパラドックスに陥る。もちろん、学問の進歩はもう一方でいわゆる精密性、厳密性を追求しまして、理知的な方に走る。そうすると、やがて全体を見失ってしまう。盲目的な前進はまさに自分自身を見失ってしまうということもあるわけです。

このように、やはり自己へ回帰する必要、つまり反省、リフレクションの問題が出てきて、あるいは自己観察という問題が必要になってくる。「いったい自分は何たるか」、これはアイデンティティの問題ですが、まさに学問の進歩においては、まさに学問が進歩するがゆえに自身を見失ってしまう、という危惧もここにはあるわけです。

そのような専門性を備えている、あるいはその専門性の特徴をもっているものですが、そこで1つ構造カップリングと創発性が出てきます。構造カップリングもやはり生物学の概念でありまして、やはりこのルーマンという人が社会システム論の中で展開している概念の1つですけれども、いわゆる異なったシステムの結合形態を表しています。つまり、1つのシステムで手に負えない場合、他のシステムを援用して、あるいは他のシステムと共同で1つのものをなして、そして1つのものを取り出して理解を与えようとしています。

ただこのとき、構造カップリングの特徴は、それぞれの2つ、あるいはそれ以上のシステムが重なるわけですが、それぞれが独立した自立性をもっているということです。つまり不完全ではなくて完全なものが共同することによって初めて1つの新しいシステムができる。このそれぞれのシステムの自立性は極めて強調されなくてはいけない。そうすると、社会学と心理学とのカップリングが当然起こるわけですが、社会学が不完全だから、あるいは心理学が不完全だから新たなものができるというのではなくて、それぞれが独立した自立性をもっているからこそ、1つの概念が生じるという事態があるわけです。ここでは当然一時的な結合となります。離れば、それぞれ独自のシステムとしてオペレーションします。ただそれが継続的に行われれば、それは1つのシステムとしてみなしていいということになります。ここに学際性ということが見えてきます。そして、まさにそれが1つの創発という概念、創発の事態であるといえるのかもしれない。

いずれにしても、学問の構造カップリングが起こった場合、それは新たな認識体系が1

つ生まれてくることだと思います。ここでやはり強調したいのは、人間科学という新しい学問が生まれてくるとすれば、もしかしたらそれは必要とされて生まれてきたのかもしれない。ただ人間を科学する、人間について知ろうとするような営為は、単に総合という名で汚されてはいけなような気がしております。それぞれの学問は学問としての歴史があり、成果があります。それを全て否定して何か新しいものをつくることばかりを主張してはいけないのではないかと思うのです。もちろんその新しい総括を否定するものではありません。

先程言いましたように、学問とその専門性には様々な歴史がございました。その中には起こるべくして起こった結果というのものもあるわけです。それは、1つの蓋然性と呼ばれる、高い確率の中で行われてきた部分かもしれない。

ところが新たな発見、新たな進歩、今までにない見解というものは極めて蓋然的な所から起こってくると思います。もちろんそれは、クーンの言うパラダイム・チェンジあるいは面と見れなくて、形だけ突然崩壊して突然安定した状況に移って、などというような状態もあるわけです。

人間に関する諸学は様々に現在存在しているわけです。しかしそれは、さらなる自己への回帰、反省する営為によってさらにそれは学問としての自立性を促すものだろうと思いますが、その一方でそのことによって新たな創発の可能性をもたらすものであると私は思っております。

時間が押し迫っておりますので、おおよそそんなところで今回の報告を終わりたいと思います。質問やご意見をいただければ幸いです。

司会 どうもありがとうございます。圓岡さんの人間科学についてのお話は、科学の定義から始まりまして、人間科学をシステム論から、ルーマンなどを参考にしながら考えたいという趣旨の報告でございました。

只今のご報告にご質問あるいはご意見がございましたら、どうぞ。

中村 武蔵野女子大学の中村孝文と申します。非常に素朴な質問なんですけど、今のお話は、ヴィッセンシャフトは科学というより知などの意味で訳した方が良いというようなお話だったと思うんです。認識の枠組みであるという理解をされたようでございますが、そうしますと、例えば人間科学という言葉は、非常に単純に、人間学というふうに呼び変えることができるのか、それとも違うのか。これについて伺いたいと思います。

圓岡 先程私はミクロとマクロという話をしましたが、全体論的な視点が人間学だろうと思います。それから、システム論的に分けましたけれども、私は、人間学というのは個別の体験についての、人間についての学問だと思います。もちろん人間学を含めた上で人間科学というも

のを考えております。人間学と人間についての学とを合わせたものが人間科学と考えておりました、今おっしゃった人間学という言葉はある意味で人間科学の中に統括されてしまう概念であると考えています。

科学という概念は本来ならば複数形で示すべきものかもしれませんが、1つの態度としては人間科学という単数形で扱っていると思います。ただ、もちろんそこで扱われたヴィッセンシヤフテンは複数形であるということは、否定は致しません。

司会 ただ今の発言と関連致しまして、常磐大学で作られたテキストを見ますと、人間科学は複数の人間諸科学ではなく、単数の人間科学になっていますが、そのあたりの問題について、どなたかご質問、ご意見ございましたら、どうぞ。

細見 私はルーマンのことをほとんど知らないんですけれども、気になったのはやはり、ルーマンのその自己言及的なオートポイエティックなシステムをそのまま人間のシステムに移し替えて、しかも左側に人間、そしてそれを扱う領域を哲学としますと、ルーマンのシステム論と齟齬はきたさないのでしょうか。そういうようにスライドできるのでしょうか。そこをお話いただけますか。

圓岡 私自身、ルーマンを直接的に引用して、ルーマンで語ろうと私はしておりません。ですから、これは私自身が借りてきたもので、ルーマンと一切関係ないということになります。ですから、ルーマンの理論と私の今日の報告とは一切関係ございません。今のご質問にはちょっとお答えしかねます。

細見 一切関係ないということではなくて、やはりルーマンのシステム論を人間科学の枠組みに生かそうという発想をおもちではないのですか。それなのにただ借りてきただけだと言われてもちょっと困るわけです。ルーマンのシステム論にある長所とかあるいは短所とかいう問題とが、そのように移し替えたときに、どういうふうに出てくるのかという点はやはり問題になるのではないのでしょうか。そうしませんと、一種の比喩みたいなことになってしまいませんか。

圓岡 私は比喩として使ったんです。ただもちろん、そのオートポイエティックのシステムであるという前提に立つならば、それぞれがやはり自立したシステムであるわけです。ただルーマンそのものは、生体システムについて語っているわけではございません。心理的システムについては語っておりますけれども、生体システムについては類型論だけで終わっております。ですから、それについてルーマン云々という議論はちょっとここでは成り立たないと思うのですが。

鮑田 愛知みずほ大学の鮑田典子と申します。初めて参加させていただいて、このフォーラムがどういう目的の会なのかが分からないものですから、非常に初歩的な質問をさせていただきます。

私は臨床心理学を専攻している者ですが、今の早稲田大学のシステム論にかんするやりとりを伺っていても、臨床心理学から見ますと、とても場違いな人間の考えをもっているような気がします。臨床の方からしますと、そんな理屈のことだけを考えるのなら、人間を考えることからどんどん離れてゆくと思うんですね。それはそれとしてよいのですが、圓岡先生に質問します。私が関心をもったのは、先生が早稲田の人間科学部の第1期生で、去年学位を取られたということです。その先生が自分の専門は社会学だとおっしゃったことが私にはとても奇異に感じられたんですね。先生の学位は人間科学博士ではありませんか。社会学博士なのですか。

圓岡 いいえ、人間科学博士でございます。

鮑田 そのこと自体がいずれにせよ今のお話の中にあっただと思います。マクロでとらえるかミクロでとらえるとか、人間の全てをすぐには全部とらえられないわけですから、人間を追求して、それで「自分は何を、どこの視点から人間を考えていくか」というのはもちろんいいんですが、それでは何かそぐわないという感じがします。みんなで人間科学を考えたときに、何が哲学から見えて、何が社会学から見えるのかが大切だと思います。私が臨床心理学で生の人間を見ようとするとときに、今までの話ではあまりに自分の世界と違ってとまどいを覚えてしまいます。これらを近づけていくにはどういう方法があるかと思いながら話を伺っていました。人間科学といっても、広い日本の中でもやはり専門家は少数しかいないわけです。先生が社会学という学問を通して人間をどうお考えになっているのかをお聞きしたかったわけです。

このフォーラムがどちらの方向にこぎ出していくのか、私もまだつかめないままに沈みかけているというような印象があります。何か今の引用1つにしても、自分には比喩として引用したのだから、その議論をするときには無関係だと言ってしまうと、せっかく確認したことが実っていないと思います。そういう人の話はずすようなことはこの場ではやめた方がよいのではないかなと思っています。感想を申しあげました。

圓岡 先生のおっしゃったことはもっともです。細見先生に対する私の回答も不十分でございます。ただ、ここでルーマン論を語りますと、1時間や2時間ですみませんし、かいつまんで云々ということは私はできません。ですから、ルーマンの理論についても、また別の機会に細見先生とお話ししたいと思います。ただこの場で、人間科学における段の所で比喩として引用して使ったわけです。もちろんそのルーマン理論におけるメリット・デメリットがございます。

これは1つの類型として私は用いたので本来ならこれを本日の出典などといってもち出す必要はなかったのかもしれませんが。「私が勝手に考えました」といって、ここで述べればよかったのかもしれませんが。ただそれだけでは、私はあまりにも不正行為をしているような気がします。もちろん、ヒントを得てはいるわけですが、出典を明かさないとするのは不正行為のような気がするものですから、出典としてあげたわけです。

それからもう1つあります。私が社会学の専門家であるという発言についてですが、社会学というのは社会だけを見ているのではなく、社会を通して人間を見ている。今では社会科学、人文科学という区分がございまして、確かに社会科学博士はないわけです。ただ、その中には行政や法学や経済学が入っているかもしれない。それを総称して社会科学博士というような総称がついたならば、「お前はいったい何だ」ということになるわけです。もちろん、人間そのものを語る、人間について見ているというときに私自身を語る必要はないということです。社会を通して人間を見ているからです。

実は、私の大学時代のことを申しますと、大学のときの指導教授が哲学の教授でございました。そのあと私は社会学に進んだのですが、そのときにきっかけとなったのは、他者の問題について考えたことです。この問題を考えたとき、やはり哲学の中では私自身行き詰まりを感じて、そこから社会学に移ったわけです。

だから、一貫して人間への関心が私にはあったわけです。だから、社会学というものが人間を見ていない学問と私は思っておりません。そういうわけで人間科学の学位を取りながらも、私は社会学の専門だということを言うわけでございます。それについて、もしフロアの方からご意見があれば、お願いしたいと思います。

司会 ただ今、人間科学の現状を知るうえでかなり象徴的な討論がございましたが、発言をどうぞお願いします。

橋本 質問します。北海学園大学の橋本剛です。このレジュメにかんして学際性と専門性という話をされたとき、構造カップリングということで、それぞれの分野の学問の自立性とその完全性ということがほとんど一緒に了解しておられるように私は理解しましたが、これはちょっと違うのではないかという気がします。カップリングする動機は何かといえば、先程の細見さんのお話でいえば、それぞれの動機の中に越境性とか、破片がある。そのあたりが動機になって、どうやら他の方に移行していくことで、カップリングが成立するのではないかと思われるのですが、今のお話では自立性がほとんど不完全な感じで、多分閉じた体系のように考えられている。そう理解してよければの話ですが、どうしてカップリングが出てくるのか、その必然性が話として見えてこないという感じがしたわけです。

それからもう1点ですが、「人間についての」というのと「人間の」というのとの違いがも

う1つ不透明ですね。この区別についてもお答えをいただけたら幸いです。

圓岡 カップリングの問題ですけれども、やはり自立性、つまりある程度学問の自立性は、学問の根拠あるいは妥当性を示すものでありますけれども、妥当性を示す母体が自立していないというのはやはり問題ではないかと思えます。その上で、その分野で手に負えない状況がある、あるいは見えてくる、だからこそカップリングするのだと思えます。だから越境したりカップリングすると、最低限の条件としてその学問体系における妥当性というのでしょうか、そこに自立性というものが浸透する。

この自立性は完全性とはちょっと違うと思えます。

司会 この構造カップリングと創造性というルーマンの概念ですが、上の生体システム、心的システム、社会システム、これ自身も人間の異なった自立的なシステムの結合形態だとすれば、構造カップリングとはこの三つのシステムのことでしょうか。

圓岡 そうとは限らないんです。例えば、脳と意識の問題の所で構造カップリングが出てきます。脳は脳として生物が自立して形成されます。ところが意識というのはやはり進展しています。そこの連携を説明するために構造カップリングという概念をルーマンは使うのです。

それから次に、人間は実は複数のシステムから構成されている統一体で成り立っている。ですから、人間はいろいろな体験をもつ。それを一言で語ってしまうには、あまりにも乱暴ではないか。もちろん私の「人間についての学問」というちょっと誤解をまねくような発言をしてしまったのですけれども、ただ個々に見ていくだけでは、やはり人間というものは生み出されてこないだろう。当然、その「人間の意味について」という問題はあると思う。生体システムを見るだけでは、やはり人間の意味というものを語るには不十分である。むしろ、そのようなトータルな複合的なシステム体の人間をトータルな視点で見る視座というものがやはり必要である。それが人間の学であり、哲学で言う所の人間的学であると考えられる。

ただ哲学だけがすべて人間科学だというのはやはりそれでも不十分だろう。人間は生命体であるし、細胞をもった人間であるわけですから、それについての関連もやはり両方で必要である。それもやはり人間科学であると思えます。

司会 意識論が生体システムとどうかかわるかは大きな問題であると思えます。ここで明らかにできなかった点は、午後の部に少し時間がございますので、さらに明らかにしながら、討論していただきたい。時間が予定よりも経過しておりますので、そろそろ午前の講義を終えたいと考えております。本日は今までのフォーラムに1つの新しい試みといたしまして、比較的若い研究者の方々の、長寿社会ということでは相対的に若い3人の先生方に非常に興味深いご報

告をいただきました。これはまだ回答を得ていない、あるいは回答に到達していない問題です。その意味では、アドルノとホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』の表現でいいますと、人間科学の一種のオデュッセイアであろうと思います。今後これをどのように深めてゆくかもこれからの問題です。

今日は、そういうわけで最後にご質問をいただいた方の御指摘のとおり、たとえば人間科学がご専門ということはなかなか言えないという状況があるのは事実です。しかし、人間科学というのはその点が問題でして、先ほどのご質問は現在の大きな問題についていると思います。未だに「人間科学会」という学会もないという中で、我々はそれぞれの社会学、あるいは歴史学、あるいは社会哲学などに属しながら人間科学を考えなければなりません。しかし、とにかく人間科学について考えるということでもとまりができています。そういうことが、人間科学が今置かれている課題を示しているのではないかと思います。

そのようなわけで、今日の研究報告では大変いろいろと重要な問題が提起されたと思うんです。私共といたしましても、このご報告につきましては、さらに詳しく正確な報告書にまとめる予定です。これからもご協力をどうぞよろしくお願い致します。

それでは午前のご報告を終わります。3人のご報告者の方にもう一度拍手をお願いいたします。

資料(3)

第3回フォーラム「人間科学を考える」

1997年9月14日

於：札幌学院大学

人間科学の行方

— 蓋然性と可能性としての非蓋然性の間で —

早稲田大学人間科学部

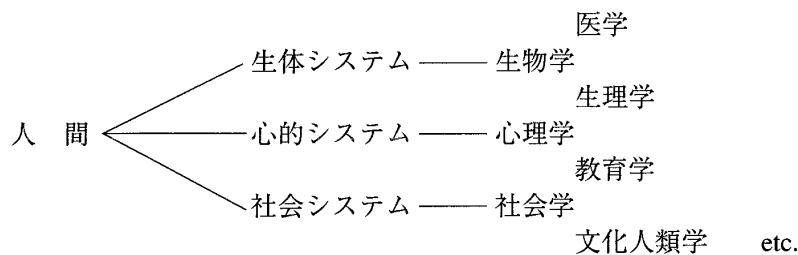
圓岡 偉男

1. 科学とは何か

- ・ 認識体系としての科学
- ・ 特定の視座としての認識
- ・ 観察と認識

2. 人間科学のシステム論的類型

- ・ 対象としての「人間」の3つの側面
 - a) 生物的側面としての内向性（個性性）
 - b) 社会的側面としての外向性（他者性）
 - c) 心理的側面としての双方向性（個性性／他者性）
- ・ 複合システムとしての人間像と諸学



3. 学際性と専門性

- ・ 専門性の限界？
- ・ 構造カップリングと創発性
- ・ 新たな学的体系の形成

4. 人間科学の行方

- ・ 専門性の蓋然性と新たな可能性としての非蓋然性

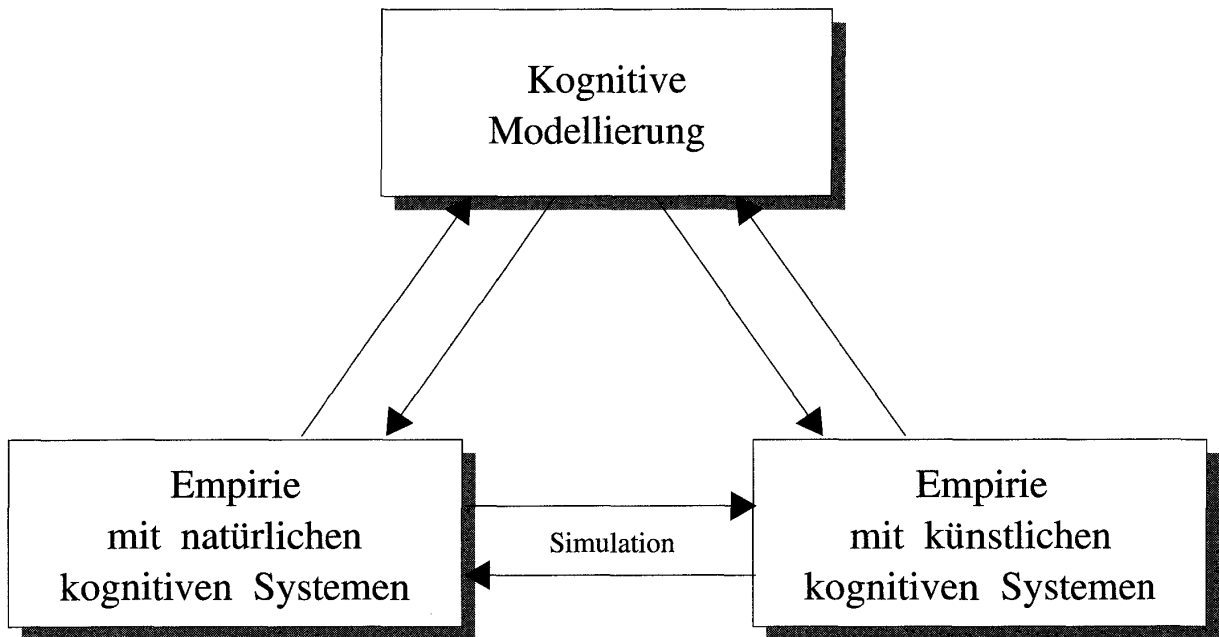
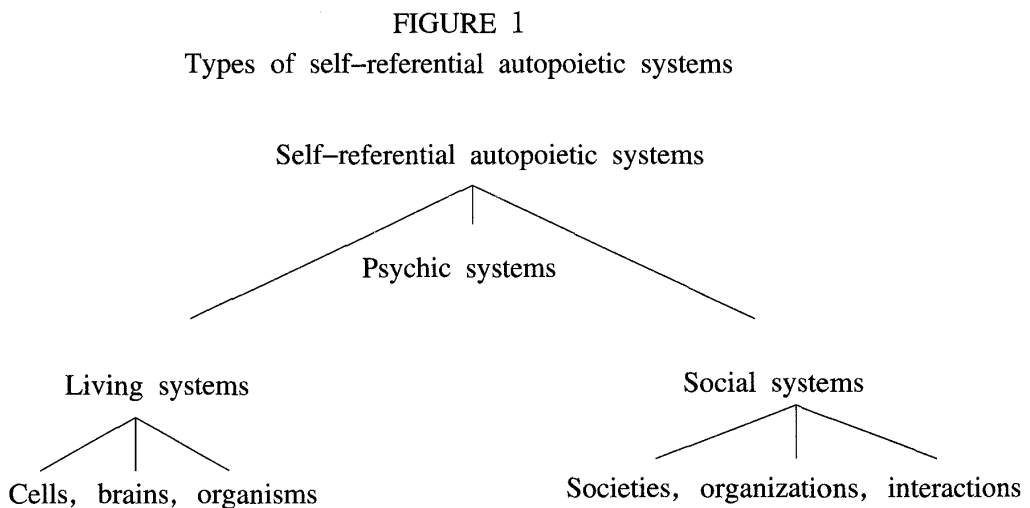


Abb. 1.3.3: Die kognitive Empirie

(出典) Hans Strohner, *Kognitive Systeme*: Eine Einführung in die Kognitionswissenschaft, 1995, S. 19.



(出典) Niklas Luhmann, *The autopoiesis of Social Systems*; in Felix Geyer/Johannes van der Zouwen (Ed.) *Sociocybernetic Paradoxes*, 1986, p. 173.